〈再著述〉としての成長とそのコミュニケーショナルな条件
—ナラティヴ・セラピーを手がかりとして—

児島　功和

人は、対話から生ずる物語によって、社会的行為主体としての感覚を引き出す。物語が、物事を判断し行動を起こす自由や能力を実感させたり奪ったりするのである。(McNamee and Gergen[1992=97:71])

1　はじめに

本稿の課題は、心理療法のひとつであるナラティヴ・セラピーについての議論を手がかりとして、現代において個人が「成長」するためのコミュニケーショナルな条件を考察することにある。成長という概念には様々な定義がありうる。ここでは私たちの日常での用い方にも近いと思われる、行為・体験の意味づけ方、別の言い方をすると、経験の意味づけ方が多様（豊か）になることという定義を与えておこう。

英語圏における重要な先行研究は、既に多くが翻訳されている。代表的理論家・臨床家とされるM・ホワイトとD・エプストンの『物語としての家族（Narrative Means to Therapeutic Ends)』やホワイトの他の著作、S・マクナミーとK・J・ガーゲン編著の『ナラティヴ・セラピー（Therapy as Social Construction)』、A・モーガン『ナラティヴ・セラピーって何？（What is Narrative Therapy?)』、H・アンダーソンの『会話・言語・そして可能性（Conversation, Language,and Possibilities)』などである。翻訳されていないものでは、J・フリードマンとG・コムによる "Narrative Therapy" が挙げられる。日本においては、野口裕二『ナラティヴの臨床社会学』『物語としてのケア』が心理療法におけるナラティヴ・セラピーの位置づけや画期性を明快に論じており、重要である。野口（2002）が述べているように、例えばホワイトとエプストン、アンダーソンとH・グーリシャン、T・アンデルセンのそれぞれに代表される立場では、臨床場面における技法や論述の強調点などにおいて差異がないわけではない。だが、ナラティヴを重視している点では共通しており、また先行研究でも一括して議論されることが多いため、本稿でも「ナラティヴ・セラピー」として一括して扱っていく[1]。

ナラティヴ・セラピーについての論考の多くが臨床家自身によって著されていることもあり、心理療法の枠内での位置づけやその論理を説明するといった議論が中心になっている。そのため個人に対して権力がどのように作動していて、ナラティヴ・セラピーがそれにどのように対抗しているのか、そしてそれが成長のコミュニケーショナルな条件を考察するうえでいかに寄与するのかといった視点が十分には意識されていない。その点について論じた数少ない例としては、J・ハーバーマスの思想研究者として知られる豊泉周治「ナラティヴ・プラクティスの政治学」という論考がある。豊泉は成長という言葉こそ用いていないものの、ナラティヴをめぐる近年の人文・社会科学研究の潮流、なかでもナラティヴ・セラピーに焦点をあててこの点について論じている。豊泉の論考は簡潔でありながら示唆に富んでおり、本稿もそこから多くを学んでいるが、ナラティヴ・セラピーの技法やその背景にある考え方について詳細に述べられているわけではない。

本稿ではそれらの先行研究を踏まえながら、ナラティヴ・セラピーやその議論の内に、現代における成長のコミュニケーショナルな条件を見出す試みである。具体的には、次節以降以下の構成で議論を進めていく。2節では、心理療法という枠の中でどのようにナラティヴ・セラピーが生じてきたのかを明らかにし、ナラティヴ・セラピーの論理を正当化している社会構成主義とはいかなる学問的立場であるのかを論じる。3節では、「問題の外在化」や「治療的会話」などの技法の意味や論理を詳細に論じ、それを手がかりとして本稿の課題である成長のコミュニケーショナルな条件を示すことにする。終節となる4節では、それまでの議論をまとめ、今後の課題を提示したい[2]。

2　ナラティヴ・セラピーの社会的文脈

本節では、ナラティヴ・セラピーの社会的文脈を論じていく。社会的文脈といっても幅広いが、ここではまず

ナラティヴ・セラピーが心理療法という文脈の中でどのように生じてきたのかをセラピストの位置づけという点に焦点を絞って、明らかにする。次に、ナラティヴ・セラピーの背景にある社会構成主義という考え方を論じていきたい。

2-1 「科学者としてのセラピスト」批判

セラピストがどのように位置づけられているのかは、その心理療法の特性を表す重要な指標となる。ガーゲンによれば、これまでのほとんどの心理療法において、セラピストは科学者として位置づけられてきたという。ガーゲンは次のように述べている。

フロイトから現代の認知療法家に至るまで、職業的セラピストは科学者としての役割を果たす（のが理想的である）という信念が共有されている（中略）。訓練された専門家は、科学者コミュニティ公認の綿密に練り上げられた語りをセラピーにもち込む。このことは、クライアントの語りに対するセラピストの姿勢を規定してもいる。クライアントの語りは、結局のところ、日常生活の雑多な出来事から作られている（中略）対照的に、科学的な語りは、専門家のお墨付きである。こうした観点からすると、セラピーの過程は、クライアントの物語をセラピストの物語に、ゆっくりとしかし確実に置き換えていくものとなる他ない。(Gergen[1994=2004:318-9])

一方に〈専門性と客観性を備えた理想的認識者〉としてのセラピストを置き、もう一方に〈精神的「病者」である非-理想的認識者〉としてのクライアントを対置するという非対称な認識的-関係的布置が、これまでのほとんどの心理療法を貫く前提であった。この非対称性を可能にしているのが、事象の本質を知る者、あるいは真理を語る者である「科学者としてのセラピスト」という考え方である。科学者としてのセラピストは、各自が依拠する学派の真理に基づいてクライアントの語りから見えてくる症状を解釈し、「治療」をおこなっていく。例えば精神分析系のセラピストであれば、クライアントのどのような物語も「ファミリー・ロマンス」の物語として解釈し、「治療」を進めていくというのもその一例である（Gergen[1994=2004:319]）。

ガーゲンを含むナラティヴ・セラピーの意義を強調する者は、こうしたこれまでの心理療法が前提としてきた認識的-関係的布置を批判する。クライアントが語りに込めた意味づけが軽視されているというのが、その理由である。別の言い方をするならば、これまでセラピストは〈大人〉、クライアントは〈子ども〉と見立てられてきた。そして〈大人〉は〈子ども〉を正解へと導いていくのが当然とされてきたが、〈子ども〉にとっての正解が何であるかを〈大人〉があらかじめ知っていることを前提にし、そこに導いていこうとするのは大きな問題があるのではないか、ということである。

したがってナラティヴ・セラピーでは、「治療」過程がセラピストとクライアントの共同で構成されるという「平等」な認識的-関係的布置を前提にする。当然ながら「平等」とはいっても、専門家とクライアントという役割上の非対称性が解消されるわけではない。「平等」と括弧で括っているのは、そうした理由からである。ナラティヴ・セラピーの「平等」な認識的-関係的布置とは、まずクライアントの物語の「重み」を尊重すること、次にその姿勢がクライアントの物語を変容させる契機になることを論理や技法の中に積極的に位置づけるということである。

D・ショーンは、科学的真理を後ろ盾に臨床（実践）の場をその適用と捉える専門家を「技術的合理性 technical rationality」に基づく「技術的熟達者 technical expert」と呼んで批判し、「行為の中の省察 reflection-in-action」に基づく「反省的実践家 reflective practitioner」と対置しているが（Schön[1983=2001]）、ナラティヴ・セラピーのセラピストは「行為の中の省察」を重視するという点で「反省的実践家」として自己を位置づけているといえるだろう[3]。こうしたセラピストの姿勢を分かりやすい形で表わしているのが、アンダーソンとH・グーリシャンが「クライアントこそ専門家である」という象徴的なタイトルの論文で挙げた、以下の事例である（McNamee and Gergen[1992=97:77-83]）。

40歳のある男性は、自分が病気になっており、その病気が他人を傷つける可能性があると強く主張していた。だが、何度精密検査を受けても、そのような結果は出てこない。しかし彼は信じることがなく、不安に怯えつづけていた。そこで彼はある精神科医の紹介で、ナラティヴ・セラピーを受けることになる。面接が始まり、セラピストが「病気にかかってからどのくらいになるのですか」と尋ねると、彼は大変に驚いた様子を見せ、次々に語りだしたという。面接後、その問いかけを巡って同僚のセラピストは、「病気にかかったと思ってからどのくらいになるのですか」と聞くべきだったと主張した。彼の「妄想」が強化されてしまうというのが理由である。だが面接を受けた後に彼は、「僕の言うことをセラピストは信じてくれたよ！」と興奮しながら語り、その後も良好な影響が続いているという。アンダーソンとグーリシャンの言葉を借りるならば、セラピストの「意

図は、男の持つ〈現実〉とストーリーに挑むことではなく、それについて学ぶこと、そして新しい意味と新しい物語が生まれる機会を作るように語ってもらうことだった。」(McNamee and Gergen[1992=97:79-80])

良好な影響が続いた上記以外の要因は記述されていないが、たった一回の面接で彼が「治癒」したわけではあるまい。ただこの面接が重要な契機になったということであろう。「反省的実践家」であるセラピストがどのように応えるかは、クライアントとの会話の中で、また会話のあり方によって変わってくるのである。以上で述べてきたように、ナラティヴ・セラピーが生じてきた背景には、「科学者としてのセラピスト」という考え方への批判があった。したがってナラティヴ・セラピーのセラピストは、科学者としてクライアントの前に立つのではなく、クライアントの物語の「重み」を尊重しながら、それとは異なる物語を共同で模索する他者として現れるのである。

2-2 社会構成主義の論理

ナラティヴ・セラピーは、クライアントの物語の「重み」を尊重する。ゆえに、セラピストはクライアントの物語を自身の物語に置き換えていく、そうした過程を「治療」と見なすことに対して禁欲的姿勢を取る。しかしながら、そもそもなぜクライアントの物語にこうした姿勢を取るのだろうか。前項で述べた「科学者としてのセラピスト」という専門性への批判とは別の文脈から考えてみたい。鍵となるのは、ナラティヴ・セラピーの背景にある社会構成主義 social constructionism[4] の考え方である。

社会構成主義は、人文・社会科学研究における「言語論的転回 linguistic turn」「解釈学的転回 interpretive turn」と呼ばれる潮流の別名といえるが、『世界制作の方法(Ways of Worldmaking)』を著した哲学者のN・グッドマンの次の言葉は、それがいかなる立場であるのかを明快に示している。

もし私が、あらゆる座標系から離れて世界はどのようかを語ってもらいたいと迫ったら、あなたは何と言えるだろうか。記述されたものが何であれ、われわれはそれを記述する方法に縛られている。われわれの宇宙はいわばこれらの方法から成るのであって、ひとつにせよ複数にせよ、世界から成るのではない。(Goodman[1978=87:4])

ここでの「座標系」や「方法」は、「言葉」や「物語」に置き換えることができる。フリードマンとコムによれば、社会構成主義は次の四つの定理にまとめられる(Freedman and Comb[1996:22])。①現実は社会的に構成される②現実は言葉によって構成される③現実はナラティヴによって組織・維持される④本質的な真理はない[5]。すなわち現実を映す「鏡」=写像として言葉を見なすのではなく、現実を構成するのは言葉のあり方であると見なす立場の総称が、社会構成主義である。言い換えるならば、社会構成主義とは、言葉のあり方によってaという行為・体験がAという現実として意味づけられたり、Bという現実として意味づけられたりするといった現実の偶有性 contingency を強調する立場だといえる。また現実が偶有的であるということは、意味が私秘的なものではなく、私たちの言語的活動と独立して自存するものでもないということ、すなわち意味が社会的であることを表しており、現実がどのような現実であるのかは言葉を媒介とした他者との関係性に依拠することを示してもいる[6]。

私たちは、成育過程で周囲にいる者とのコミュニケーションによって文化的道具である言葉を身につけ、言葉の組織形態である物語によってあらゆる行為・体験を意味づけるようになる。そして意味のネットワークとしての物語は、私たちにとって自明の「地平(現実)」として機能するのである。この点についてJ・V・ワーチは、K・バークに由来する「用語のスクリーン terministic screens」という言葉を用いて次のように述べている。

言葉は、ある特定の状況で私たちが言いたいことを反映したり、伝えたりする、その度ごとに新しく作られるわけではない。そうではなくて、私たちは話す時はいつでも、すでにある用語やカテゴリーに「入りこむ」必要があるのである。(中略)バークが指摘しているように、これはある種の避けることが可能な誤りとか欠点といったようなものではない。そうではなくて、用語のスクリーンを採用しないで話をすることは不可能であり、それは話をしたり考えたりする時の人間の条件の一部となっているものなのである。(Wertch[1998=2002:61])

ある物語が自明の「地平(現実)」として機能するということは、それ以外の物語が選択的に排除されるということである。逆に言えば、ある物語が選択されないことによって、私たちはある選択された物語としての現実を生きることができる[7]。言語的活動を含めてあらゆる行為は道具によって媒介された行為であり、どの道具を用いるのかによって行為のあり方も変化する。当然ながら、言葉という文化的道具にもこうした性質=「アフォーダンス affordance」が備わっている以上(Wertch[1998=2002:42-7])、どの言葉、どの物語が選

択されるのかによって現実のあり方も大きく変わるのである。

本項の最初の問いに戻ると、ナラティヴ・セラピーがクライアントの物語の「重み」をそれまでの心理療法よりも重視するのは、クライアントの用いている語彙や物語が、そのまま彼あるいは彼女の生きている現実となっているからである。そうであるからこそ、前項で取りあげたセラピストはクライアントに対して、「病気にかかったと思ってからどのくらいになるのですか」ではなく、「病気にかかってからどのくらいになるのですか」と尋ねるのだ。それでは、クライアントの生きている物語＝現実の「重み」を尊重することが、具体的にどのようにクライアントの物語＝現実を変容させることに繋がるのだろうか。

3　成長のコミュニケーショナルな条件

本節では、ナラティヴ・セラピーで用いられる技法や姿勢に焦点をあて、それを手がかりとすることで、成長のコミュニケーショナルな条件を考察したい。鍵となるのが、「問題の外在化」と「治療的会話」である。議論を先取りするならば、成長することは自己物語 self-narrative の多様（豊か）な〈再著述 re-authoring〉が可能になるということである。そしてそれが可能になるためには、「問題の外在化」が促され、支えられるような他者との「治療的会話」が必要となるのである。

3-1 「問題の外在化」と「生きられた経験 lived experience」

社会構成主義によれば、私たちは物語的現実を生きているということになる。したがって成長とは、自己物語、あるいは物語としての自己を再著述することとして規定できる。しかしながらそれは容易なことではない。長い時間をかけて選択・維持されてきた自己物語は、その者が生きる自明の「地平（現実）」となっているからである。ここではホワイトとエプストンによる事例を参照しよう。少し長いものとなるが、本項で明らかにしたいことが明快に表れていると思われるので引用することにする。

26歳のキャサリンは、13歳の時、背中に深刻な怪我を負った。身体的な制約が残ったことに加えて、かなりのしつこい痛みが残った。この痛みに対しては、多くの検査やさまざまな治療も役に立たなかった。事故の時以来キャサリンの人生は上手くいかなくなっていて、私に紹介された時には、彼女はかなりの不安と抑鬱に苦しんでいた。

初回面接では、キャサリンは母親のジョアンに付き添われてきた。私は、彼女らの人生と人間関係における痛みの影響をマップするよう促した。痛みがキャサリンの人生にもたらしたたくさんの障壁のひとつとして、よく知らない人とは接触できないということが挙げられた。キャサリンとジョアンに彼女らの問題に対する影響をマップするよう促しながら、痛みのせいで他の人と個人的な接触が続けられそうにないと感じたにも関わらず、それをはねつけた体験を思い出せるかどうかキャサリンに尋ねた。

20分ほど思いあぐねた後で、彼女は3年前の出来事を思い出した。その時、彼女は家からそう遠くない所をすこしばかり散歩していたのだが、知らない人が反対方向から近づいてくるのに気がついた。見知らぬ人はフレンドリーに見えたので、彼女は彼が自分に挨拶するだろうと思った。彼女は気持ちを落ち着けて、彼が通り過ぎる時にお辞儀をして「こんにちは」と言った。これは、後からしてみれば思いもよらない離れ技だったのだが、その時点で彼女はそのことの重要性に気がつかなかった。

私は、この出来事について意味づけするように二人を促した。どうやってキャサリンは知らない人が近づいて来た時に不安を払いのけたのか？どうやって背を向けずにすんだのか？これをするのに、彼女はどんな準備をしたのか？もしその時、彼女がこの出来事の重要性に気がついていたとしたら、その後の彼女の進歩にどう反映したでしょうか？（中略）この歴史上のユニークな結果の同定は、それがおきてから3年たった現在において、キャサリンとジョアンのターニング・ポイントを構成したのである。(White and Epston[1990=92:79] 下線は引用者による)

この事例から見えてくるのは、まずキャサリンが子どもの頃の深刻な怪我を契機として、「よく知らない人と接触できない」という物語を生きてしまっていることである。次にセラピストとの会話が、その物語とは異なる物語を生きるための「ターニング・ポイント」となっているということである。こうした変容を可能にしたのが、「よく知らない人とは接触できない」という物語に空いている〈穴〉[8]である。この〈穴〉に関連して、ホワイトとエプストンも参照しているE・D・ブルーナーは、次のように述べている。なお、当文脈でのドミナント・ストーリーとは、いま現在の自己物語のことである。

物語構造は経験を組織し、意味を与えるが、そこにはいつもドミナント・ストーリーには十分には包含されえない感覚と生きられた経験が残されてしまう。ただ新しい物語が優勢になることによってのみ、過去は捉えなおされることになり、かつての複数の話が再発見され、解放と抵抗という新しい主人公の再生がなされるのである。(Bruner[1986:143])

どのような自己物語にも「生きられた経験」という〈穴〉が空いているのであり、それは自己物語が成立するための不可視化された前提である。G・アガンベンの言葉を借りるならば、「口で言い表せない、発表されない、というのは、いずれももっぱら人間の言語活動に内属するカテゴリーである。(中略) 言いえないものというのは、まさしく、言語活動がなにものかを指示するために前提にしなければならないもの」(Agamben[1978=2007:3] 強調は引用者による) なのだ。ナラティヴ・セラピーのセラピストは、このような機能を果たしている「生きられた経験」に焦点をあてて会話をおこなうことによって、上述の例であれば、「よく知らない人とは接触できない」といったキャサリンの自己物語の再著述を支え、促すのである。ナラティヴ・セラピーにおける「資源とは、『語られていないこと』や『これから語られるべきこと』、つまりクライアントの私的な思いや自分の中だけの会話というような『表現されない領域』」(Anderson[1997=2001:151]) ということになるだろう[9]。

ナラティヴ・セラピーでは、クライアントの「生きられた経験」という未だ言葉になっていない「言葉」、あるいは現実になっていない「現実」に形を与えるために必要なのは、「問題の外在化」だとされている。クライアントはあらゆる問題を伴った自己物語を面接で語るが、その語りの形式は基本的に「私は〜な人間です」というものであり、「〜」には自己否定的な内容が入る[10]。キャサリンであれば、「私はよく知らない人とうまく接触できない人間なんです」ということになるだろう。こうした語りの形式から見えてくるのは、問題がクライアントという人間の本質として捉えられており (私＝問題)、問題が問題として捉えられているのではないということである (私≠問題)。問題の外在化とは、このように自身の本質的な問題だと捉えるクライアントの「生きられた経験」に焦点をあて、クライアント自身と問題を切り離すこと (＝外在化) をおこなうということである。そして「外在化の過程を通して、人々は人生についての再帰的な見方を手にし、人々が彼らと彼らの人間関係を決定し特徴付けているものとして経験としている『真実』に挑戦し、新しい選択を手にする」(White and Epston[1990=92:51]) のである。

このような問題の外在化を促す具体的方法の一例としては、「影響相対化質問 relative influence questioning」(White and Epston[1990=92:63]) がある。影響相対化質問とは、①問題がクライアントにどのような影響を与えてきたのかをマップする (問題→クライアント) ②問題に対してクライアントがどう「寄与」してきたのかをマップする (クライアント→問題) という、問題とクライアントをめぐる相互的な影響関係をマップする質問のことである。先ほど取りあげたキャサリンの事例において、下線で強調したセラピストによる「問題に対する影響をマップするよう」な尋ね方は、こうした技法を表したものである。

3-2 再著述能力と「治療的会話」

クライアントが問題を問題として捉えることができず、問題を私という人間の本質として捉える時に失っているのは、現在の自分とは異なる自分を想像＝創造する力、あるいは自己物語を再著述する能力といえる。それでは再著述能力を失ってしまうという事態は、偶々ある特殊な個人に起こったことにすぎないのだろうか。もちろん程度の差はあるだろう。だが、この問いに対して、ナラティヴ・セラピーの論者 (特にホワイトとエプストン) は「否」と答えている。彼らによれば、それは近代における権力のあり方と深く関わっているのだ。

ホワイトとエプストンは議論の中で、当然ながら事例紹介や技法の説明に多くのページを割いているが、一見唐突に M・フーコーによる〈知＝権力〉という近代的権力の機制についての分析を挿入し (例えば White and Epston[1990=92] の２章)、踏み込んだ考察をおこなっている。ホワイトとエプストンによるフーコー解釈とは、次のようなものである。

社会には、「男というものは〜である」「女というものは〜である」「結婚というものは〜である」「夫婦というものは〜である」「家族というものは〜である」「労働というものは〜である」等など、それ以外にもありとあらゆる知識が網の目のように張りめぐらされている。それらの知識は記述的・事実確認的 constative な言葉として中立を装いながらも[11]、規範として、あるいは権力として私たちの日常生活に浸透し作動している。前節で述べたように、意味づけの文化的道具である言葉は私有できるものではなく社会的なものである以上、経験をどのように意味づけるかは当該社会における〈知＝権力〉の布置に影響されざるをえない。すなわち言葉が私たちを社会的存在としており、その点で言葉は私たちを結びつける絆として機能している。だが、そうであるがゆえに私たちは自分自身の経験を自由に意味づけることができず、言葉は自己を他者へと従属させる鎖ともなるのである。フーコーは近代におけるこうした〈知＝権力〉の機制を明らかにしたのだと、ホワイトとエプストンは主張する。ホワイトの次の言葉は、以上のフーコー解釈の要約といえる。

何が「正しい」かというのは、各文化に特有なものです。「正しい」ことは、私たちの人生になんらかの操作を課すものですし、その大半はジェンダーや社会階級に特有のものです。こうした操作を介して、私たちは、自分たちの思想を支配し、他者との関係性を支配し、自分たち自身との関係性を支配し、自分たちの身体との関係性さえも支配するのです。(White[1995=2000:24-5])

キャサリンの事例であれば、彼女を苦しめていた自己物語の背景にある〈知＝権力〉とは、深刻な怪我のせいで現在もなお痛みに苦しみ、かつ身体的な「問題」も抱えているような人間は人とうまく接触できない、というものであろう。ここで想像力を働かせてみよう。仮に、深刻な怪我のせいで現在もなお痛みに苦しみ、かつ身体的な「問題」を抱えているような人間だからこそ人とうまく接触することができるという意味づけがなされる社会だったら、キャサリンの自己物語は同じものになっていただろうか、と。

ホワイトとエプストンが、ナラティヴ・セラピーを近代的権力への対抗実践のひとつと考えているのも、こうした文脈においてである。繰り返しになるが、自己物語を再著述するために必要なのは、問題の外在化を促すような他者との会話である。アンダーソンとグーリシャンは、こうした性質の会話を「治療的会話」と呼び、この会話に必要なのは、他者による「無知 not-knowing の姿勢」であると述べている。「無知の姿勢とは、セラピストの旺盛で純粋な好奇心がその振る舞いから伝わってくるような態度ないしスタンスのことである。つまり、(中略) 話されたことについてもっと深く知りたいという欲求を表す」(McNamee and Gergen[1992=97:67-8]) 姿勢のことである。別の言い方をすると、「あなたに興味があるので、もっとあなたの話を聴かせて欲しい」という姿勢である。無知の姿勢で「居る」者は、他者をある知識でもって決めつけることはせず、会話において他者が自己の想定する他者像＝「客体化 (物象化)」を超えた形で現れることを享受する。そして「生きられた経験」という「語られていないこと」に焦点をあてて、問いかけていくのである[12]。「治療的会話」は、「経験を別の形で区切ることを可能にし、多元的な視点を開発させ、共存を保証するので、程度は違っても、クライアントが自分の経験と向き合う姿勢を変える力となる」(McNamee and Gergen[1992=97:214])。

このような姿勢で「居る」者が単なる話の受け手としてではなく、自己物語の共著者として「居る」姿勢を持っていることによって、私たちは自分たちを規定している当該社会における〈知＝権力〉の網の目を緩め、自己物語を再著述する能力を得ることができるのである。「re-authoring」はホワイトが使い始めた言葉だと思われるが、彼自身を含め先行研究では物語の再著述（書き換え）という意味で用いられており、これまでの本稿記述においても同様の意味で用いてきた。しかしながらホワイトがどの程度意識していたのかは定かではないが、「author」が著者という意味であることを考えれば、「re-authoring」は自己物語を著述することが可能な著者に再びなること、自己の主体性を再び取り戻すことという意味も込められていると解釈できる。したがって成長するために決定的に重要なのは、「治療的会話」によって、いま現在の自己物語を捉えなおすことができるような「余地」が開かれること、あるいは再著述能力という主体性を「回復」することである。成長することは、以上で示してきたようなコミュニケーショナルな条件によって支えられ、促されるのである。

4　おわりに

本稿では、ナラティヴ・セラピーについての議論を手がかりとして、現代において個人が成長するためのコミュニケーショナルな条件を考察してきた。

経験の意味づけ方が多様（豊か）になる＝成長するためには、いま現在の経験を規定している〈知＝権力〉を緩めることによって、「余地」を確保することが必要となる。そのための条件となるのは、無知の姿勢で「居る」他者を共著者として見立てうること、そしてそのような他者と自己物語の再著述が促されるような「治療的会話」をかわすことであった。以上の議論をまとめあげる鍵概念が、再著述能力である。能力という言葉には、個人が所有しているモノというニュアンスが一般的にはある。しかしながら再著述能力という能力は、無知の姿勢で「居る」他者との「治療的会話」において生成されるものであり、クライアントはセラピストと「治療的会話」をかわすその過程の中で、いま現在の自分とは異なる自分を想像＝創造する能力を与えられ、再著述すること＝成長することが可能になるのである。以上が、本稿で明らかにしてきたことのまとめである。

最後に、今後の課題を二つ提示しておきたい。一点目は、「生きられた経験」について本稿で明らかにした以上に踏み込んで論じるという課題である。「生きられた経験」とは一体何であり、それが自己物語の再著述にどのように繋がっているのかというメカニズムを問うことは、「いかにして教育は可能になるのか」という教育可能性を問うことに深く関わっている。この問いに答え

るのは一見簡単なように思われる。例えば、「私たち人間は生得的にそのような性質を持っているから」というように、である。しかしながらこの答えは、教育が可能となった（「成功」した）後、事後的にのみ意味を持ちうるものであり、この答えをナラティヴ・セラピーに置き直すと、自己物語の再著述がなされたのはクライアントがそのような性質を持っていたからと答えるのに等しい。ここでの教育可能性の問いとは、生得的な性質を持っていたとしても、それがいかにして自分自身を陶冶することに繋がるのかを明らかにするということである。もっとも「生きられた経験」を問うことは、言葉になっていない「言葉」がいかにしてそれまでと異なる自己物語として生成するのかを言葉によって記述するという困難さを伴ってはいるが、「生きられた経験」について踏み込んで論じることは、教育学的にもきわめて重要な意味を持っているといえるだろう。K・モレンハウアーが有名なカスパー・ハウザーのテキストやアウグスティヌスの『告白』といった文学、絵画など豊富な例を基に教育可能性について説得的な議論をおこなっており（Mollenhauer[1983=87]）、この課題の分析方法という点で参考になると考えている。

二点目の課題は、成長を困難にしている具体的な社会状況や制度とは何かを明らかにするという課題である。ホワイトやエプストンが論じていたように、問題が問題として捉えられるのではなく、人間の本質として帰属処理されるのは現代社会に浸透した文化である。しかしながら本稿では、このような文化がどの社会領域でいかなる制度として具現化しているのかを論じることができなかった。この課題に取り組む時、荻野達史（2006）がD・コーネルの概念「イマジナリーな領域」を用いて、「不登校」「ニート」「ひきこもり」状態にある者を支援している近年の社会運動を概観した論考が参考になると思われる。管見によれば機能的な観点から見て「イマジナリーな領域」は、本稿で用いてきた「余地」という概念と近似しているというのが、その理由である。いずれにしても自己の成長が他者との関係性に依拠しており、他者の成長もまた自己との関係性に依拠しているように、自己と他者が互いの「成長への共同投企」（橋本[1999:11]）者であることのできる社会的条件、私たちが互いにとって「無知の姿勢」で「居る」ことのできる制度とは何かを問うことが重要になるだろう[13]。

注

1. 論者間の詳細な差異については、野口（2002）の特に7章と8章が参考になる。
2. 訳文は訳書がある場合は基本的にそれに依拠したが、原書を参照しつつ、その都度ことわることなく変更した箇所もある。また「ナラティヴ narrative」という言葉は、「語り」とも「物語」とも訳すことができるが、文脈に応じてそれぞれを使い分けることとした。
3. ナラティヴ・セラピーについての著作は、G・ベイトソンの影響を受けたシステム療法や精神分析系など他の心理療法の著作と比較すると読みやすいという印象を受ける。これは偶々そういった志向の著者が多いということではなく、ナラティヴ・セラピーが体系的理論への志向が弱いということの表れであろう。
4. バーの著作“An Introduction to Social Constructionism”が『社会構築主義への招待』と訳されているように、social constructionism＝社会構成主義というわけではない。また social constructivism という言葉もあり、社会構築主義と訳されることもある。だが、constructivism が主に認知心理学で使われてきた言葉であり、本稿で中心的に参照するナラティヴ・セラピーの議論や社会（心理）学では主に constructionism＝構成主義という訳語が一般的であるという千田（2001）の指摘に依拠して、本稿では（social）constructionism を（社会）構成主義とすることにした。
5. 社会構成主義に対しては、「なんでもあり anything goes」の相対主義に陥っているとの批判がある。ガーゲンは反論しているが（1994=2004）（1999=2004）、その論理の妥当性を検証することは本稿の課題を超えるためおこなわなかった。本格的に議論するためには、真理が社会的に構成されるとはいかなる文脈でどのような事態を表しているのかという文脈設定と文脈ごとの厳密な論証が必要となるだろう。管見によればリンチの著作（Lynch[2005]）が、この点を考察するうえで重要である。
6. 意味の社会性については、大澤（1994）がN・ルーマンやS・A・クリプキなどを参照しながら精緻な議論をおこなっており、参考になる。
7. レイコフとジョンソンは、メタファーについての著作の中で、「time is money」という私たちにとって馴染み深いメタファーを取りあげていて、大変に興味深い（Lakoff and Johnson[1980=86:9-11]）。このメタファーを生きる私たちの社会では、時間が目的 - 手段関係の中で捉えられる希少な資源とされて

いるのであり、「time is money」もまた「用語のスクリーン」として私たちの現実を構成している。

8. 〈穴〉という表現については、浅野（2001）の1章の議論から示唆を受けたものである。
9. 論証という点では十分ではないが、ピカートが1948年に「沈黙」について述べた次の言葉は、現在もなおその意義を失っていないように思われる。「人間は話をしている際に、何事かを内心に保っておくことも稀ではない。（中略）それはあたかも、人間が自己の内部にある沈黙に、当然沈黙の所有に帰すべき分け前をあたえねばならないかのようである。（中略）だから、転生のためには沈黙の実体が必要なのである。」（Picard[1948=64:72-6]）
10. こうした語りの形式をホワイトは「内在化する会話」と呼び、このすぐ後で述べる、問題を問題として語る形式のことを「外在化する会話」と呼び、内在化する会話を外在化する会話へと変えていくことがナラティヴ・セラピーの課題であると述べている（White[1995=2000:36]）。
11. 前節で述べたように、社会構成主義とはこうした本質主義的かつ客観主義的な知識観を斥ける立場のことをいう。
12. 本稿とは異なった文脈からではあるが、現象学者の鷲田（1999）も「聴く」という言葉・姿勢を手がかりとして、同様のことを論じている。
13. ここでの「成長」を社会構想における理念とするという発想は、橋本（1999）の提唱する「成長論的自由主義」に関する議論に大いに触発された。

引用・参考文献

Agamben,G.1978,*Infanzia e storia:Distruzione dell' esperienza e origine della storia,* Giulio Einaudi（＝2007, 上村忠男訳『幼児期と歴史――経験の破壊と歴史の起源』岩波書店）.

Anderson,H.1997,*Conversation, Language,and Possibilities: A postmodern approach to therapy,* Basic Books（＝2001, 野村直樹・青木義子・吉川悟訳『会話・言語・そして可能性――コラボレイティヴとは？セラピーとは？』金剛出版）.

浅野智彦.2001,『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ』勁草書房.

Bruner,E.M.1986 *"Ethnography as Narrative"* Turner,V.M.and Bruner,E.M.eds.*The Anthropology of Experience,*University of Illinois Press.

Burr,V.1995,*An Introduction to Social Constructionism,* Routledge（＝1997, 田中一彦訳『社会構築主義への招待――言説分析とは何か』川島書店）.

Freedman,J.and Combs,G,1996,*Narrative Therapy:the social construction of preferred realities,* W.W.Norton & Company.

Gergen,K.J.1994,*Realities and Relations:Soundings in Social Construction,* HarverdUP（＝2004, 永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践』ナカニシヤ出版）.

Gergen,K.J.1999,*An Invitation to Social Construction,* Sage Publications（＝2004, 東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版）.

Goodman,N.1978,*Ways of Worldmaking,Hackett* Publishing Company（＝1987, 菅野盾樹訳『世界制作の方法』みすず書房）.

橋本努.1999,『社会科学の人間学――自由主義のプロジェクト』勁草書房.

Lakoff,G and Johnson,M.1980, *Metaphors We Live by,* University of Chicago Press（＝1986, 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店）.

Lynch,M.P.2005,*True to Life:Why Truth Matters,* The MIT Press.

McNamee,S.and Gergen,K.J.eds.1992,*Therapy as Social Construction,*Sage Publication Ltd（＝1997, 野口裕二・野村直樹訳『ナラティヴ・セラピー――社会構成主義の実践』金剛出版）.

Mollenhauer,K.1983,*Vergessene Zusammenhänge:Über Kulter und Erziehung,* Juventa Verlag（＝1987, 今井康雄訳『忘れられた連関――〈教える－学ぶ〉とは何か』みすず書房）.

Morgan,A.2000, *What is Narrative Therapy?:An easy-to-read introduction,* Dulwich Centre Publications（＝2003, 小森康永・上田牧子訳『ナラティヴ・セラピーって何？』金剛出版）.

野口裕二.2002,『物語としてのケア――ナラティヴ・アプローチの世界へ』医学書院.

野口裕二.2005,『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房.

荻野達史.2006,「新たな社会運動問題群と社会運動――不登校、ひきこもり、ニートをめぐる民間運動」（日本社会学会『社会学評論』57（2））.

大澤真幸.1994,『意味と他者性』勁草書房.

Picard,M.1948,*Die Welt des Schweigens,* Eugen Rentsch Verlag（＝1964, 佐野利勝訳『沈黙の世界』みすず書房）.

Schön,D.1983,*The Reflective Practitioner:How Professional Think in Action,* Basic Books（＝2001, 佐藤学・秋田

喜代美訳『専門家の知恵――反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版）.

千田有紀.2001,「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房.

豊泉周治.2006,「ナラティヴ・プラクティスの政治学」（『唯物論研究年誌』11,唯物論研究協会）.

鷲田清一.1999,『「聴く」ということの力――臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ.

Wertch,J.V.1998,*Mind as Action,* Oxford University Press（= 2002,佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子訳『行為としての心』北大路書房）.

White,M.and Epston,D.1990,*Narrative Means to Therapeutic Ends,* Norton（= 1992,小森康永訳『物語としての家族』金剛出版）.

White,M.1995,*Re-Authoring Lives:Interviews&Essays,* Dulwich Centre Publications（= 2000,小森康永・土岐篤史訳『人生の再著述――マイケル、ナラティヴセラピーを語る』ヘルスワーク協会）.

White,M.2004,*Narrative Practice and Exotic Life: Resurrecting Diversity in Everyday Life,* Dulwich Centre Publications（= 2007,小森康永監訳『ナラティヴ・プラクティスとエキゾチックな人生――日常生活における多様性の掘り起こし』金剛出版）.